
生徒革命

BREAKER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒革命

【Nコード】

N7872G

【作者名】

BREAKER

【あらすじ】

西暦25XX年・・・この世の中は『学校』でうめつくされていた・・・

第一部 『学校生活』 第一話 ホームルーム

西暦25XX年・・・

この世の中には『先生』以外の職業はない。会社などもちろんなく、この世の中にある建物は家と『学校』だけだ。そしてそこには多種多様の『生徒』がいた。

【ホームルーム】

- 不良生徒 -

「あー！つたくよお！やつてらんねえんだよお！」

ガン！とドアを蹴る音が廊下に響いた。

今の時間は朝のホームルームの途中。普通なら教室にいて先生の話を聞いているはずなのだが、彼はさっきの言動の通り『不良』だ。話などまともに聞いてはいられないようだ。

「上山！席に戻れ！」

教室からもう一人の男性がでてきた。どうやらこのクラスの担任のようだ。

「その上から目線が気に入らねえんだよ！」

「そんなことは当たり前だろう。私は『先生』でありお前は『生徒』なのだからな。」

「んだとお」

上山と呼ばれた少年は静かに、だけど素早くその先生の元へいき胸倉を掴みあげた。

「てめえ何様だ？」

「様をつける程ではないがお前より偉い存在だということは確かだな」

先生の方は冷静にきつぱりと言った。

「ふざけんな・・・てめえら『先生』とやらが勝手に決めたことだろ！そんな自分勝手な事に俺ら『生徒』が従う必要はない！」

「フンツガキが」

と誰にも聞こえないよう小さく言った。

「そろそろ教室に戻れ。早くホームルームを終わらせたいからな」この愚図と言いながら掴まれていた胸倉の手をパンツと払い、ツカツカと教室へ戻っていく。

しかし上山の方は今ので完全に理性が飛んでしまったようだ。

彼は三步で追い付き後ろから蹴り飛ばした。

「話は終わってねえ」

と静かに言う。すると先生の方は

「『学校絶対禁止条令』の第1、『校則』にあたる、第1702学
校則、『生徒が先生へ暴行を振るう事は、いかなる事情があつてもしてはならない。』に反した。よって、特別処置を行う。」先生は
そう言うのと腰の後ろからある物を取り出し、それを上山に向けた。
その瞬間、ドンという音がした。その後誰かが倒れる音がした。そこには火薬と鉄の臭いが充満していた。この事に騒ぎ出す者は誰も
いなかった。

第一部 『学校生活』

第一話 ホームルーム（後書き）

まずは謝ります。

すみません

えゝ以上です。

・・・なんかすみ

ません

では

第二話 学校授業時間目録

【一時間目】

- 優等生く劣等生 -

「あああああ！！いてえ！イテエよあ！！」

そこにはふとももを手で押さえ、その下からダラダラと血を流している上山が倒れていた。

「はーうるさいなーそんな怪我すぐ治るだろうに。」と上山を見下ろすように隣から少年が言った。

彼の名前は、原田優徒。

このクラスの優等生的存在だ。

「だいたい、お前は何度も何度も同じ事を繰り返して何がしたいんだ？まったく学習能力のないやつだ。だから劣等生と・・・」

「あーっ！うるさいうるさい！わかったよ！俺が悪かったよ！」

優徒の言葉を途中で上山が遮る。

「つーっ！！！！さっさと治してくれよ！！」

数秒後に保険の先生が来て保健室へと連れて行ってしまった。

「さあ一時間目が始まるぞ早く教室に戻りなさい」

この学校には全部で十二学年あり、一学年にA～Oまでの15クラスある。上山や原田のクラスは十一年のFクラスだ。

「一時間目は数学か・・・」

原田はそう呟くとすぐに教科書やノート、ワークを用意してチャイムも鳴らないうちに復習を始めた。

さすが優等生。

一方上山の方は

「いでででで！！ふざけんな！！優しくやれ！！」

と叫びながら性懲りもなく騒いでいる。

さすが不良。

いや、さすがと言うべきなのか・・・

キンコーンカーンコーン

一時間目の開始のチャイムが鳴り響くと同時に数学の『先生』が現れた。

その先生はこのクラスの担任でもある南野数一だ。

「授業を始める前に前の授業で言っておいた宿題を提出してもらう。忘れた奴は言いなさい」

すると数人の生徒が前に出た。

「お前たちは今日の放課後までにやって持って来なさい」

「・・・はい」

と小さく返事をして数人の生徒は席に戻る。

「では宿題を前に持って来なさい」

そう言われるとぞろぞろ生徒たちは立ち上がり宿題を提出する。

南野は出席番号順に宿題を並べていく。

が

「・・・ん？女子の十八番山里利恵！早く提出しなさい」

そう言われると一人の女子が静かに立ち上がり、恐る恐る前にでて言った。

「あの・・・すみません・・・えっと・・・あの・・・宿題を・・・えっと・・・その・・・忘れて・・・しまいました・・・」

「何故さっき言ったときに言わなかったんだ」

南野は静かに、素早く聞いた。

利恵の方は聞かれるとビクツと震えまた恐る恐る言った。いや、言っていない。ただ

「えっと」や

「あの」を繰り返すだけだ。

南野はそれにいらつきながら

「何故だと聞いている。答えられないのか？」

と再び聞くが利恵は何も答えない。

南野はとうとう我慢しきれずに言った。

「この愚図生徒が、貴様のような劣等生に付き合っているひまはない。しっかりものを言う事すらできんのか。もういい！席につけ。授業の妨害になるからな」

南野はそう言うのと集めた宿題を確認し始めた。

利恵の方はその後も五分程立っていたが

「早く席につけ、授業の邪魔だ。」

と南野に言われた。

その時この場の全員はこう思っただろう。

（授業してねーじゃん）

それはさておき利恵の方は今にも泣き出しそうな顔をしている。それに気付いた南野は

「ちっこれだからガキは」と小さく呟き

「お前も後でやって持って来なさい」と言った。

利恵は目から一筋の涙をこぼして

「・・・はい・・・」

と言い席に着いた。

利恵の後ろの席の女子が今だに泣いている利恵に

「大丈夫？」

と声をかけた。

だが南野は

「そこ！授業中は私語を謹みなさい！」

と厳しく注意する。だが利恵の後ろの席の女子黒井真知は、もともと気が強く、男勝りな性格の上このクラスの学級委員長である。

彼女は南野のあまりの仕打ちに怒りを覚えていた。

「先生！」

彼女はついに我慢しきれず声を出していた。

「何だ？黒井」

「山里さんがかわいそうです！あんな言い方あんまりだと思います」

！」

「何を言っている。劣等生にはちょうどいいどころか物足りないくらいだ」

「そうやって人を劣等生とか優等生って差別するの、やめてください！」

「・・・差別？・・・」

南野はそこで一度呆れたようにため息をつき、それからまた言う。

「黒井・・・お前は成績優秀の優等生だ。そんな考えはすてなさい。」

「

「優等生とか劣等生とか、そんなのじゃなくてもっと『生徒』を見て下さい！」そこでガラガラッと教室のドアが開く。そこには先程保健室に運ばれた上山が立っていた。

「やめな、黒井。そいつら『先生』が『生徒』のことをちゃんと見るわけねーだろ」

「上山、あんた」

「こいつらは俺らのことは所詮道具かなんかとしか見てないにきまつてる。だいたいこいつらは

「お前らは何か勘違いしていないか？」

南野は上山の言葉を遮りながら言った。

「私達『先生』の仕事、それは優等生はさらなる高みへ、劣等生はその学校に相応しい生徒に、お前はこれを差別と言ったがこれはただ人により対応が違うだけだ。」

「ぐっ」

上山は言い返せなかったが黒井は

「ちがう！そもそも優等生とか劣等生に分けるのが間違ってる！」

「実際分ける程の差があるのだ」

「それでも！劣等生を馬鹿にしているいい理由はない！」南野はそこで笑いをこらえるようにして言った。

「何を言っている？劣等生とは他より劣る存在と言う意味だ。つまり今お前は劣等生のことを劣等生と馬鹿にしたのだろっ」

「っ！？ちがつ」

「一つだけ言っておく」

南野はまとめるように言った。

「優等生は良し劣等生はクズなのだよ」

教室の中は静まり返っていた。一時間目はのこり少ない。

第二話 学校授業時間目録（後書き）

いつも通り先に（？）謝ります

すみません

なんか途中

の作品もあるんですがこっちのが書きたいんで（勝手だな）

第三話 休み時間

キンコンカーンコン

一時間目終了のチャイムが鳴った。休み時間だ。

「まだ一時間目か」

上山はそう呟きながら伸びをする。むろん彼はノートなどならず、ぼーっとしているだけだったのだが。

「なあ上山、お前怪我はもう治ったのか？」

と上山の前の席の風間瞬が上山にきいてきた。

「ん？んゝまあぼちぼちな。痛みはもうないけど傷が軽く残ってんだよね」普通なら有り得ないのだがこの学校の保健室には体の自己回復力を高める装置があるのだ。それになにより南野が撃った弾、あれはうつつと弾のほとんどが崩れる仕掛けになっており、皮膚にあたる頃には威力の少ない形になっている。その他にもこの学校には、いや、この世界にはいろいろと進化した機械が発明されている。しかしこの世界には科学者や発明家はいない。全て各学校の校長先生が会議を行い、その結果を元に教頭先生がつくりだしているのだ。

「またか、お前それでいくつめだ？」

と次の理科の準備を既に終え、復習を始めている原田が言った。今の原田の言葉とか上山の普段の態度とかでわかるところだが、上山は常日頃から『先生』達に逆らってばかりいる。そのため、特別処置を行われ、回復する、を繰り返しているのだ。

「うるせーな、てめえみてーな優等生にや関係ねーだろ」

「さっき黒井が言ってた事もう忘れたのか？」

「あっ！」

見ると黒井を含む女子のほとんどが上山をにらんでいる。

「いや今のは口がすべったというかなんというか、いやその・・・ホラ！くせでさ！」

「
」

黒井が口パクで何かを言った。それを見ると上山は、上山はなぜか泣き出した。

「どうした上山！」

「あいつだ！黒井の仕業だ！」

数人の男子がそう言ったが黒井はしらをきっている。

「お前！一体何を！」

「とぼけんなー！お前がやったんだろ！」

それだけ言われるとさすがに何かを『言う』かと思っただが何も『言わなかった』ただ、オーラを出しているのだ。そのオーラは自分のしたことを自覚している。その上でそのオーラはこう言っていた。

『それがなにか？』

キンコンカンコン

休み時間が終わった。動きだす者はいなかった。ほとんどの人が黒井のオーラに圧倒されていた。

第四話 学校専用物

【二時間目】

- 親友 -

「なあノブ、今日どうする？」

「やっぱいつも通り俺ん家でいんじゃない？」

「またかよ？たまにはさあほら、アレだよほら」

「アレじゃわかんねーよ」上山と話しているのは高杉伸也。上山の親友に当たる存在だ。彼らは学校でも日常生活でもたいてい一緒にいる。

「うーし席つけー授業始めるぞー」

ガラガラと扉を開け入って来たのは理科の浅井だ。彼は南野のようなきつちりかつちりしたような性格とは打って変わり、だらだらした感じの『先生』だ。そのためか皆からは好かれている。特に原田は理数系は好きのため浅井の事はかなり尊敬している。

「チツやってらんねー」

だが上山は浅井の事は、いや、どんな先生だろうと信じていないだろう。彼が信じているのはただ一人、高杉だけだ。

「先生、俺とノブは休みまゝす」

「おゝわかったゝ速やかに出ていけゝ」

「はい」

上山と高杉はスタスタと出て行ってしまった。

「うんじゃ始めるぞゝ」

「先生！」

と、そこで原田が拳手をした。フォームがすばらしく整った拳手だ。

「んゝ？なんだゝ？」

「先生、いいんですか？あの二人の態度」

「あゝいいのいいの。来るものは拒まず、去るものも拒まず。これ、俺のスタイルだからさ」

「――なるほど、さすが先生です！」

何がさすがなんだか・・・

「ヒヒヒ、浅井だと楽に抜け出せるな」

「あの先生、テキトーすぎないか？」

今上山達は十階の廊下を歩いている。

（ちなみに学年ごとに階がある。）

この学校は十三階建てだ。というのも、この十階には教室はなく、ほとんどが移動授業の際に使う部屋ばかりなのだ。つまりこの階には先生はいない。授業中はおおさらしない。彼らは何の遠慮もなく話すことができるのだ。

「はゝ学校に隕石おちねーかな」

「な」

「はゝ実はここの土地に埋まつてるかもしれない不発弾が爆発して学校崩壊とかなんねーかな」

「な」

とそこで上山が起きあがりすぐそばの部屋へ入っていった。

「どうした？」

「お前も来い！」

声をおさえて高杉を中にいれた。

「何だよ？」

「誰かくるぞ」

「えっ？」

カツコツという足音が聞こえる。誰もいない廊下ではよく響いた。

「あいつは」

だんだんと近き見えたその人物は

「教頭先生？」

「そうか、教頭なら授業やってないしここ通つても不思議じゃないか」

「いやちがう」

「？何が？」

「見るよ上山、教頭先生なんかそわそわしてないか？それに辺りを見回してるし早足だ」

しばらく見ていると教頭は上山達がいる部屋の前でピタリと止まった。

（やべっ！ばれたかな）

（いや、大丈夫、ほら）

教頭は上山達がいる部屋の向かい側の部屋に入ってしまった。

その部屋の名は・・・

「『学校物開発室』か、何か作んのかな」

「だろうね」

「のぞいてみねえ？」

「俺もおもった」

「キマリ！」

悪巧みは五秒で成立。部屋をそと抜け出し、『学校物開発室』の扉に背をつけ扉についているガラス越しに中を覗く。そこには・・・そこには、何もなかった。そして、誰もいなかった。教室から机や椅子、黒板やロッカー等を取り除いたただの部屋だ。

「何だ、この部屋？」

上山が不思議そうに言う。

「お前知らないのか？ていうか気付けよ。こんな丸見えのところで研究とか開発なんてするわけねーだろ？極秘なんだし」

「そっか、んじゃ教頭が消えたのは何故だ？」

「あんな、この部屋は下の部屋につながってんだよ。下からは入口がないから入れないんだ」

「下って九階か？」

「さあな、そこまで知らねーよ」

「じゃどーやって覗くんだよ！」

「そりやお前」

そこで高杉は間をおいて言った。

「入るんだよ」

「あやっぱ？」

「んじゃ、レッツ？」

「ゴー！！」

そついうと上山は大胆にもガラガラと音をたてて中に入る。

「えーと入口はー？」

部屋全体を見回すが入口らしいものは何もない。あるものといえば掃除用具入れくらいだ。

「やっぱあれか？」

「開けようぜ」

ギーガチャつと鉄を引っ掻くような音がしてから開いた。そしてその中には

「モップ？」

「と、ちり取りか」

「何だこの組み合わせ、てか何でこんなもんが」

「とりあえず入口ではないか」

「待てよのぶ、上にもなんかあるぜ」

用具入れの中の上の方には何か置けるようにベニヤ板が取り付けられている。元は何もなかったらしい。

「何で板なんて強引に取り付けてあんだ？」

「ん、なんかあるぞ」

上山が手を伸ばして板に置いてある何かをつかむ。

「重、けっこう重いぞ」

「ちよつとみせろよ」

「わってるよ、ソラ！」

上山が取り出したそれは形は拳銃に似ているが拳銃の銃口にあたる部分が丸く膨らんでいる。そして引き金もない。色は、ベースは黄

緑で所々に黄色やオレンジ色がある、といったものだった。

「何だ、これ？」

「形からして拳銃っぽいけどなあ。撃てる？」

「引き金がないんだなこれが」

「なんかいろいろやってみるよ」

「もうやってるんだなこれが」

上山はカチャカチャといじくりまわしている。すると用具入れの下の方からカツコツとさっきと同じ足音が聞こえてきた。

「まさか教頭！？」

「いったん出よう！」

二人は部屋からでるとガラスごしに部屋を覗く。

「あの下に入口があったのか」

「おい、それしまつとけよもらつちまおうぜ！」

「あつたりめーよ！」

上山が服の下にその拳銃のようなものをしまった瞬間、上山達がいる隣の部屋の扉がガラガラとあいた。

「む？君達、何をしている今は授業中だぞ」

そこからは、教頭が出てきた。その部屋は、ていうかそこはトイレだった。

「あーいやーそのー」

予想外な所から教頭が出てきて驚いていた高杉は何も言えなかった。が、上山はテキトーな嘘を思いつくと

「いやいや、ただこのガラスで自分達の顔を見てどっちがイケメンか言い争ってただけっスよ！な？」

「え？あ、ああ、そうそう！そうなんスよ！」

「授業中にそんなことしてちゃだめだろう。いやもう授業も終わるころだ。早く教室に戻りなさい。」

「はい、二ヒヒ、馬鹿な教頭だぜ」

「よくあんな事が思いつくな」

上山達は教室に向かい歩きだす、が

「君達！」

「げ！聞こえたかな？」

「だとしたら相当な地獄耳だぞ」

「君達の今の授業は？」

「ホッ何だ。」

「理科です」

「理科というと・・・あゝ浅井君か、通りでねえ」

「？」

「？」

「いや、いい。行つていいぞ」

「それじゃま、行きますか？」

「あ、ああ」

二人が歩き出したところでチャイムがなった。後ろに教頭の姿は既になかった。

第五話 休み時間（前書き）

久しぶりですね。まあこういうこともあるさ。人間だもの

第五話 休み時間

キンコンカーンコンチャイムが鳴った。休み時間だ。

先生のいないその教室には数人の男女が上山の周りに集まっていた。

「なあなあ！それなんだよ上山！」

「見せて見せて！わあ！なにそれ！すごい」

「駄目だ！これは秘密にしとくのだ！」

「いーじゃねーか」

「そうだよ」

「いーや駄目だ」

「ケチ野郎ー！」

「サイテー！」

「ぐっ！？く、何と言おうが秘密だ！」

流石にそこまで言われぐらつきながらも堪えた上山だがその後も悪態をつかれまくりついに

「あーもー！わかったよこのヤローー！！言やーいんだろー！言やー！」

「イヤーってどこの言葉だよ」

「早くしてよ」

「このっ！っち、いいだろう、順をおって話してやるからよく聞け」

上山はコホンと咳ばらいをしてみんなが静かになるのを待つ。

「実はだ！これは！なんと！えー、実に！あーものすごく！うー・

・

「ものすごく何だよー！」

「焦らすなー！」

上山のなんともまどろっこしい言い方に愚痴をとばした数人の男子を「うるせー！だまってきいてろ！」

と上山が怒鳴る。

（うーん、どうするか）ここまで言っちゃったら言わねーわけにい

かねーしな〜でもこれが何かなんて俺も知らねーし」

やはりボケでいくか？いやしかしツツコまれてもツツコまれなくて
も事態は進展しない、いやしかし！など迷っていたがやはりここは
ボケでいくよーだ。

「『次回に続く！』な〜んて・・・？」

「なんでだよ！いいから早く言えつつつてんだよ」
即答だった。

（やっぱりかー！というか何だよ今の何ですか！？なんかこう一応
ツツコまれたけど全くツツコンでないみたい！握手したあと手を
ふかれた感じのあの！！あれ？ちがうか？）

全く進展しない事態にどうするかと悩んでいた時に、思いついた。
最高？いやいや最低？な言葉を。

「いやーはっはっは！みんな知ってつか？」

「何が？」

「実は、俺って」

「うん」

「嘘つきなんだ！だからこれについては教えん！」

「はー！！！！？」

「がーっはっはっは！」

ふざけんなーとかふざけないでよーとかの文句が一斉に上山にあび
せられた。

そこで

「おい、そりやないだろ？早く教えろよ」

と不良とかではないが、悪巧みやケンカなどはなぜか一流の堀之内
海上が何やら怒り気味で立ち上がった。

「いやあの海上さん！？これには実は海よりも深いワケがあつて
ですね！」

流石の上山も堀之内には逆らえないようだ。

「どうせそれも嘘なんだろ？嘘つきの上山クン！」

「ギイクウ！イヤーそのーあっはっはっは！」

「「「あつはつはじゃねー!!!」」」

キンコンカンコンチャイムが鳴った。皆が集まっているところから数メートル離れた場所で実は高杉が真相を言っていることなど誰も知らず三時間目が始まる。

第五話 休み時間（後書き）

次回はちょっと特殊なものを書こうと思っています

第六話 秘密事項（前書き）

すみません。特殊なのまた今度でいいですか？
し訳ございません。

誠に申

第六話 秘密事項

【三時間目】

- 校長先生 -

「失礼するよ」

三時間目の社会の時間に校長先生は現れた。

理由？ああ、それは多分あの二人だろう。さっきの時間に何かをしていたあの二人。

「上山君と高杉君はいるかな？」

高杉はピクつときた。

上山は寝ていた。

「校長先生、どうされたんです？」

社会担当の嶋田が言った。彼女（彼女、っていうかおばさん）は、何と言うかお節介な人って感じの人だ。

「いやね、ちよつと二人に話しがあつてね」

ちなみに校長はおっさん。ハゲてはいない。まあ温厚な人だ。

「二人が何かやらかしたんですか？」

「いやいや、ただ話しをしたいだけだよ」

「はぁ・・・」

嶋田は不思議がつっていたが高杉や上山は大変身に覚えがある。それはあの部屋で見つけ持ち帰ったあの

「上山、上山、起きろよ！おい上山！」

高杉は小声で呼ぶが上山は反応しない。仕方ないので上山の前の席の風間に起こしてもらった。

が

「上山ー！起きろー！高杉が呼んでるぞー！ついでに校長もなー！」
おもいつきり大声だ。これじゃこつそりしてた意味がないと高杉は額に手をあて俯いた。

さらに

「んだよコラー！いくら校長でも俺の安眠を妨害するのはゆるさねー！髪引っこ抜くぞ！」

こちらも大声だった。そしてさらに最悪な言葉が

「んゝ、あれ、校長って髪あつたっけ？」

寝ぼけた上山はとんでもない事を言ってしまった。いや確かに校長と言ったらハゲてるイメージも無きにしもあらずのような気も・・・だからと言ってこのタイミングはまずい。非常にまずい。とそこで

「君かね？上山君というのは」

校長先生が上山のすぐ目の前にいつの間にか立っていた。

「んゝ？そうスよ」

「話があるんだけど、いいかい？」

「別にいいスけど」

いくら何でも校長先生には上山も敬語もどきを使っていた。まあ態度は机に突っ伏しているという非常に悪いものなのだが。

「じゃあ、ちょっと来てくれるかな？」

「はいゝはい」

そういうと上山は立ち上がり校長と共に歩いていく。そんな二人を遠目に高杉はこう思っていた。

（俺は、いいのか？よかったゝ）

だが次の瞬間、校長先生が何かを思い出したかのようにクルッと振り返り高杉に向かって言った。

「ああ、そうそう、高杉君も来てくれるかな」

（なにー！？忘れてただけかよ！）

はああと深くため息をつきながら、上山、校長と共に高杉も教室を出ていった。

「・・・あの、先生？」

「なんだね？」

「一体どこまでいくんですか？」

「もう少し先だよ」

「そ、そうですか」

この三人は、教室からかなり離れたところにいるのだが、まだ歩くというのだからおそらく、教室から少し離れた所というわけではなく目的の場所があるのだろう。その場所とは・・・

（まつまさか！超性格のねじまがった不良をもげんなりさせてしまふというあの伝説の特別室に連れていくつもりか！？）

ちなみに上山の方は、いかにも眠いですと言わんばかりに大あくびを連発している。

そして、三人が来た場所とは

「こつ、校長室？」

「何か問題あるかね？」

「い、いえ何でも」

「さあ二人共、入って」

校長室には一人用の豪華なソファと無駄にでかい机、床には赤い絨毯がしいてあった。

校長先生はどこからともなくパイプ椅子を取り出し二人にすすめた。

「さて、と、いきなりで申し訳ないんだけど、いいかな？」

「は、はい」

高杉は心底ビクビクしながら返事をした。

上山は何かぼーっとしていて、見えないものを見るような目で校長先生の頭上あたりを眺めていた。その顔からは恐れのようなものは感じられない。

「話しというのはだね」

妙にゆっくりとした口調で校長先生は言った。

「今度、君達のクラスに転校生が来ることになったんだよ」

「・・・へ？」

「何でも君達はあのクラスの中心のような存在なんだってねえ？だから君達でクラスに馴染めるよう手をかけてやってほしいんだよ」

「ええと、え、あ、はい、いいですけど」

高杉は説教だと思っていたのだから、これを深い意味にとらえず、軽い気持ちでオーケーしてしまった。

「本当かね、いやこれが転校生というのも内気な子でね、君達が前もって知っているなら安心だよ」

その後も高杉と校長で転校生についていろいろ話していたが、上山は一言も喋らず顔をしかめていた。

「失礼しましたー」

上山と高杉は、ほとんど残りの授業時間のないころにでてきた。

「いやーよかつたなー説教じゃなくてさ！でも変な事押し付けられたな、転校生の面倒みるだなんてさ」

「ん？ああ、そうだな」

上山は何か考え事をしているように適当に相槌をうった。それに氣付いた高杉が上山に声のトーンを下げてきいた。

「どうした？」

「何か変じゃねえか？」

「何が？」

「転校生の事だよ、こんなことわざわざ呼び出してまで言うことか？しかも校長が」

「そついやそうだけど」

「だいたいこの時期に転校っていうこと事態おかしいし」

「まあなあ」

高杉はあまり深く考えずに適当に促していたが、上山は難しい顔をして、深く考えこんでいた。滅多に見ないこの顔を見て高杉は何か複雑な気持ちを抱いていた。

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った。

そこで上山は言った。

「階段上んのだる！」

その表情がいつもの上山に戻っていたことに高杉はなぜか嬉しさを感じていた。

「・・・上山」

「ん？」

話すことは特にないけど呼んでみた。それだけだ。呼ぶ必要はない。呼ぶ理由もない。でも、なぜか呼んでしまう。それが、親友ってものだ。

「何でもねえよ！」

そういうと高杉はパンツと上山の後頭部を叩いた。

「あた！？うんにやろう！まてい！」

そこには楽しそうに階段を上る少年が二人。

第六話 秘密事項（後書き）

えー。ちょっと休載したいと思います。夏に相応しい物語り考えたんで、夏休み中に書きたいと思うんでそっちに専念します。それが完結したらまた始めます。すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7872g/>

生徒革命

2010年12月3日05時33分発行